

YAML

title: "紫斑病性腎炎における血漿交換療法"
author: "河西 紀昭"
affiliation: "北里大学医学部小児科"

서론

紫斑病性腎炎の一部は面凹複合体病で進行する。しかし紫斑病性腎炎では、体内で対応している検査法では面凹複合体がどの発見されない。大半のFc受容体系による検査法では良好に検出できる。したがって筆者は紫斑病性腎炎の発症中に面凹複合体をC1q結合試験とplatelet aggregation testの2つの方法で検出した。また、治療中にも7回の血漿交換を行った1例を経時に面凹複合体を検討した。

대상 및 방법

23例の紫斑病児（ヘルニアの手術検査など）で生まれた子供と、26例の紫斑病性腎炎児の検査は-70°Cに保存した。患者はすべて北里大学病院に入院し、全体的にアトピー性紫斑病と腎炎が確認された。治療中には7回の血漿交換を行った。

- **血漿交換**: Model 30を使用し、血漿交換は全員と新鮮冷凍血漿を使用した。
- **platelet aggregation test (PAT)**: Pentinilineを使用して方法の変更を行った。
- **C1q binding assay**: Zublerの変更を用いた。

고찰

이번 연구에서도 전과1)과 마찬가지로紫斑病性腎炎에서는 Fc受容体系による検査法(PAT)により血中に面凹複合体が高濃度で存在することが確認されました。また、血漿交換療法のマーカーとして使用することができます。

그러나 PATの増加は「細胞外」の説明が可能ですが、本来は陰性であったC1q結合値の陽性化を説明することは困難です。新しい疾患の出現がイマノグロブリンの影響を受け、これがC1q結合値の陽性化を引き起こす可能性がある。

C1q結合値の陽性化と同時に血清クレアチニンの悪化が観察されました。これは...

결과

正常者のC1q結合値は0.7から5.8%の範囲でした。PATの値は全て無症候性でした。筆者の研究ではPATの値の増加が頻繁でした。

26名の紫斑病性腎炎患者ではC1q結合値は1例(当日値8.2%)を除きすべて正常でした。陽性PATの値は8例で確認されました。

7回の血漿交換を受けた患者は発症時11歳の女性で、発症後11ヶ月後に北里大学病院入院しました。発症前6ヶ月に1回の腎生検を行い、約50%の糸球体に反節性が見られました。発症直後からPATの値が測定され、約6%の値を示しました。発症時のC1q結合値は陰性でした。血漿交換を開始して7週間後にPATの値が約6%に改善しましたが、最大で陽性化しました。その後、C1q結合値は当初の陰性に戻りましたが、PATの値は大幅な増加を示し、これにより血清クレアチニンの悪化が観察されました。